

# 本居宣長

——その教育者の側面——

前 野 喜代治

## 目 次

はしがき

緒 論——宣長の学問・思想の発達過程——

第一節 幼少年期の基礎的教養

第二節 京都遊学期の成長

(i) 医師としての修養 (ii) 医師以外の諸教養 (iii) 人間的成長の京都遊学生活

第三節 帰郷後の動静

(i) 医業の開始と生業観 (ii) 古学への傾斜の強化 (iii) 真淵との対面

第四節 宣長の学問的成長と業績

(i) 門弟としての宣長 (ii) 宣長の学問的業績

本 論——宣長の教育者の側面——

第一節 鈴屋門下生の検討

(i) 入門誓詞 (ii) 鈴屋門弟数の調査 (iii) 門弟の職業別年次別分布 (iv) 門弟の分布と鈴屋学の普及度

第二節 鈴屋教育(学)の構造

(i) 鈴屋教育(学)の基調 (a) 学問する目的 (b) 夾雑物の清掃——立志とその永続 (ii) 鈴屋教育の教材(内容) (iii) 学習方法上の諸提言 (a) 自主性の尊重 (b) 玄人稽古説 (c) 回帰的学習法 (d) 講釈問題 (e) 聞書問題 (f) 自主的抄録の必要 (g) 方法論余説 (ii) 鈴屋の訓育観

第三節 落穂一束

(i) 師説の尊重とその批判 (ii) 学説の改進とその発表 (iii) 異(誤)説と秘事口伝

む す び

付 本居宣長研究書

は し が き

今日を去る六十五年前、私は高等小学校第二学年の生徒として、その国語の時間に「本居宣長」(国定高等小学読本巻三・第三十一課)を学習した。これが宣長との最初の出会いである。その七年後、私は京都

府師範学校付属小学校訓導として「松阪の一夜」(国定小学読本巻第十一課)という一課を同校第六学年児童に教授した。この二度目の出会いは往年と立場を異にするだけに感慨また自ら別なるものがあつた。以来宣長に対する関心は細々ながら絶えることはなかった。

さて、終戦後一般にコペルニクスの価値転換によって、宣長に対する評価は様々である。或る人は依然高く彼を評価するが、他の人は敬遠し、さらに他の人は葬り去ろうとさえする。私は昨夏、松阪(松阪の阪の字は明治以前は坂の字を用いた。本稿ではすべて阪の字に統一する)の現地に宣長の遺跡をかなり詳しく探訪した。それ以来、宣長を「国学の大人」としてではなく「教育者としての側面」に強い興味を抱くようになった。この小稿はその模索の足跡である。すなわち、この緒論では宣長の学問、思想の成長過程を概観した。それは次の本論への準備のためである。本論では教育者としての宣長を探求し、そこに「鈴屋教育(学)」ともいう試案を私案として提示して見た。「遼東の冢」に似たこの私案に対し大方のご批判、ご教示をいただくことができれば幸甚である。

## 緒 論

——宣長の学問、思想の発達過程——

### 第一節 幼少期の基礎的教養

宣長は伊勢国飯高郡松阪町本町木綿問屋小津三四右衛門定利の子として、享保十五年(一七三〇)五月七日誕生。時に父定利三十六歳、

母かつ二十六歳、幼名を富之助と称し、その後幾度も改名している。宝暦五年二十六歳で名を宣長と改めたので以下すべて(幼少期さえも)宣長と記述することにする。

宣長十一歳の年に父死亡、家運傾き始め、松阪の本店や江戸の分店の家業の整理、住宅の移転等が行なわれた。宣長自身も十九歳の時伊勢山田の紙商の養子となったが三年足らずで離縁し帰家した。また小津姓から本居姓に復姓した。これらの経緯、身辺雑事の記述はすべて省略し、専ら彼の幼少年期の教養について概観することにしよう。

宣長は上方風の家風の裡に順調な成長をした。それは尚武的ではなく尚文的、雰囲気であった。八歳の八月から十一歳まで西村三郎兵衛に就いて手習いを学び、十二歳から斎藤松菊を師匠として本格的に習字に励んだ。さらにこの年の秋から岸元仲に四書の素読と猿楽・謡曲等を学んだ。長じて十七歳から浜田瑞雲に射術を学び、十九歳には山田吉右衛門に就いて茶の湯の稽古もした。この年山田の紙商に養子入りをした際にも商売より和歌や俳句を好み、同地の宗安寺住職法幢和尚から和歌の指導を受け、正住院住職から五経の素読を学んだ。他方、小津家は浄土宗を奉じていたから菩提寺である樹敬寺で融通念仏の業を修していた。また近親の村田元治から垂加神道の教えを聴くこともしばしばあった。山田の紙商への養子二か年余のうちに伊勢神宮に参拝すること二十余度、これらみな後年深く皇道に参入する素地となつたといえよう。

要するに宣長は、その家風も少青年期の教養も尚文的であった事が

基盤となり、敬虔的な人柄を形成しその学説が主情的で物のあわれを説くようになり、その肖像に刀が無用な宣長に成長したものと考えられる。

## 第二節 京都遊学期の成長

### (イ) 医師としての修業

宣長の生家は父の死後家業（木綿商）不振、ジリ貧の形勢である。しかも宣長の性格は商業に不適。これを看破した母かつ女は宣長に医を以て身を立てさせる方針を決意した。宣長も異存はなかった。彼は後年母を回顧して「わが家の資も朝の露とぞ消へ失せぬ。われもし、医師の業を始めざらましかば、家の産絶へ果てなましを、恵勝大姉（母の法名）の御はからひは、かへすがへすもありがたくおぼゆる。」（家の昔物語）

当時医師の修業地は京都に如くはない。宝暦二年（一七五二）三月五日、宣長二十三歳、松阪を発して京都遊学の途についた。着京後、医道修業の基礎的教養のため先ず漢学を修めるよう堀景山に入門した。景山は林道春の門人堀正憲の子孫で代々広島藩の儒官として京都に住していた。景山は荻生徂徠とも親交があり儒者であると共に国文の造詣も深かった。宣長はこの景山の下で五経の素読・史記晋書の会読・左伝・易経の講釈等漢学一通りの勉学に精励した。

漢学の修業一年有半、宝暦三年七月からいよいよ医学の学習に入った。すなわち医師堀元厚に入門し靈枢・局方發揮・素問・運氣論等の

講義を受けた。翌年正月、元厚死亡、よってその五月から典業武川幸順の門に入り、十月からは同家に寄寓し本格的に医学を修めることになった。武川は宣長入門当時三十歳の壮年であるが小児科医の名門であった。宣長は本草綱目・婴童百問・千金方等の会読を受け、以後宝暦七年十月まで小児科を中心に医学全般を専修した。その学業の進むに伴ない服装も当時の医師の慣習であったように十徳を着用し、脇差を帯し、頭髪も総髪とした。宝暦五年三月十二日付母からの書簡はこのことを示している。「そもじ殿もいよくいしや相ぞくの心がけにて名も御改め（春庵）十徳を節供より着申され候由めでたく悦び申候。」（本居宣長小伝―山田勘藏著）

### (ロ) 医師以外の諸教養

宣長在京中の教養はただ医学の一面に限られていたのではなかった。詩文・和歌・国文等の方面にも識見を高めた。詩文は到底和歌に及ばないとしながら「詩文稿」の著述さえある。そこに収める詩二十三首、文章五篇、その中に「読書」と題する五言詩がある。「独坐三間窓下」<sup>ノミ</sup>読書欲<sup>ス</sup>三晩星<sup>ナラント</sup>一<sup>ゾ</sup>夜々何須<sup>ゾ</sup>睡<sup>ル</sup>一<sup>サモアラハレ</sup>任<sup>ニ</sup>醉<sup>シ</sup>群<sup>ヲ</sup>経<sup>ル</sup>」<sup>ヲ</sup>以て彼の学習の様相が窺われる。

歌道では篠原章尹の門弟となり、その「新国津島」の歌会に出席し、後には有賀長川の月次歌会にも出席、帰国直前まで続けた。ただし歌道の学習はわが古道に達する不可欠の道程だったからである。

国文・和書については「自然の神道」であるわが国の大道を知るためという立場から特に関心を強めた。宣長をしてこの方面に志向させ

たものは漢学の師堀景山である。景山の友人に樋口宗武があり、宗武は大阪の僧契沖の門人今井似閑の弟子である。よって契沖の所説は国文に関心の深い景山にも伝わっていた。宣長は景山の導きにより契沖の主張を知りその卓見に心を動かし始めるのである。この間の事情は宣長の著玉勝間巻二（玉勝・二）に見られる。「さて京に在りしほどに百人一首の改観抄を人に借りて見て、始めて契沖といひし人の説を知り、そのようにすぐれたる程も知りてこの人の著たる物、餘材抄・勢語憶断などを始めその他も次々に求め出でて見ける程に」云々。実に宣長が歌道に心をひそめ、後年古学に専念するようになる素地は、この景山を通して契沖の書に出会ったことに依るところが大きい。

#### (4) 人間的成長の京都遊学生活

人間としての宣長は在京遊学中の自由な生活によって大きく成長した。彼は決して頑な書齋裡の学究生活に終始したのではなかった。学友と共に四季折々に京洛内外各地の行楽と探訪をなし、乗馬や観劇さへは三味線の会合にも出入して青春を謳歌した。また煙草を大いに好み、二十四歳の時「尾花が下」なる著述によって彼の煙草に関する興味を物語っている。特に飲酒を好み浩然の氣を養った。その「少年行」に「白頭猶且醉花曲」莫道少年数举杯 一擲千金春酒裏 揚々意氣亦雄哉」と。その頃の宣長を彷彿たらしむるものがある。一方、必ずしも富裕でない生活の中から宣長へ学資を送っていた母は、宣長の飲酒についてしばしば切々たる忠告の書状を送っている。「酒のことよく／＼心に入れつつしみ申さるべく候——酒飲み申され候毎に親へ

の不幸とわれらが事も思ひだし候て杯三ツより上はたべ申されまじく候。また深くしい候人々ご座候はば、遠方ながら母見て居申し、堅く申越居候故、日々の誓言と存じこの上たべ申さぬ由御申し堅く／＼慎しみ申さるべく候。」（宝暦六年七月十九日付、母五十二歳より春庵宛の書状）

右に見て来た宣長在京五か年の生活振りは孤独冷徹な学究の日々ではなく、偏狭な死灰枯木者流の生活でなかった事が明白である。そこに見聞の広く人に接して温容・円滑かつ豊裕な人間性への成長過程が察知される。と同時に母かつ女は修業中のわが子を溺愛することなく適切な訓誨を加える賢母であった様子が窺い知られる。

要するに宣長の在京遊学期は、生涯の家業の修業期であったのみならず、その学問と人間的成長の基礎を築いた重要な時期であったのである。

また宣長は頗る旅行を好み、しきりに諸方に旅した。彼の年譜に見える旅行だけでも十七回もある。明らかに記録されていないが名勝旧蹟地の探訪、神社仏閣への参拝、親戚故旧への訪問、医療のための出張等々にいたっては枚挙に遑がない。これらすべての旅は単なる肉体の移動ではなく、そこに自然と人生とに関する知見を広めかつ高め、性格を練磨し、多くの知友を得る等々彼の人間的成长に資する所大いにあるものがあった。

宣長中年以降は各地から講釈に招請されることが多かった。その際は幾人かの門弟が随行した。それは門弟教育の一つの機会でもあった

が歌の指導、国学の振興が主目的であった。それ故、目的地における精力的な講釈はもちろん、その往復途次の小邑でも請われるままに講釈を試みた。まして堂上貴紳からの招請には欣然として誠に意欲的であった。享和元年三月、公家中の名門中山愛親卿の招請による上京の場合は、その七十余日間に「諸方への文通、疑問・詠歌の添作、講釈等段々と差し集どひ不<sub>レ</sub>得寸隙」と告白している通り、七十二歳の老齢とも思われない精力的な活躍であった。

およそ旅は年齢と共にその意義を変える。右の宣長の旅行も、その前半生においては自己研修的色彩が濃厚であり、後半生では歌道や国学の振興、国学の発展のための旅が主であったと言つてよい。

### 第三節 帰郷後の動静

#### (イ) 医業の開始と生業観

宣長は宝暦二年三月から同七年十月まで四年七か月にわたる京都遊学を終えて郷里松阪に帰った。そして母の切なる期待に應えて帰郷後間もなく小児科を主とする医業を開始した。医を以て生計を立て頼勢の本居家を挽回する責任と自負に基づくものであった。のみならず一段と高次元の生業観に立脚しての医道の開業であった。鈴屋答問録に「何れの病も神の仕業にあらざるなし。さて病める時に或る薬を服し或いはくさぐさの技をしてこれを治むるもまた皆な神の御仕業なり。この薬をもてこの病を療すべく、この技をしてこの患を治むべく神の定めおき給ひて、その神の御霊によりて病は治るものなり」という一

節がある。

これによると、医師は随意に診断し恣意に治療するものでなく、神に代り神の仕業たる病を診断し投薬し施術し、神の霊力によって健康を恢復するものとの古道説に立つ医業観である。医業の尊嚴の自覚であり徹底した生業観である。かつて佐々木信綱は「医師としての宣長」について「宣長は家で講釈中でも往診を頼んで来る時は『人の生命にかかることであるから暫し御免を蒙る』と中座して病家赶赴かれ」（賀茂真淵と本居宣長二〇四頁）たと述べている。

一般に生業は単なる家庭経済だけでなく神に代り神の道の実現であるとの生業観に立つ宣長のことであるから、歌文について何程かの才能のあることを鼻先にぶらつかせて家業を怠っている門弟に対し「家のなりなおこたりそみやびをのふみをよむとも歌を詠むとも」（古学要附録）という一首を与えた。洵に痛烈な頂門の一針といふべきである。

右のような立場から医業に精励した宣長はその治療費・医薬代に不当な要求をする筈がない。毎日の調剤や収入を克明に手記した済世録がこれを実証している。

他方、門弟指導面からの収入はどうか。簡単な束脩や期末の謝礼の程度で恒常的な定収入はない。宣長は世にいう学商ではなかった。要するに本居家の家計は決して富裕ではなかった。後年紀州侯に仕え扶持米を給せられるようになるが、それだけ生活程度も高まり結局収支の均衡を失ない、幾度か近親に借金を請うた記録が残存している。

#### (四) 古学への傾斜の強化

宣長は上京遊学から帰郷後数年間は身辺雑事相重なったが宝暦十二年（宣長三十三歳）正妻たみ（改め）を得、翌年長男（春庭）生誕し、医業も定着し、いよいよ念願の学問に精進し得る環境となった。

宣長が上京中に契沖の諸著に触れ歌学の造詣を深め古学に開眼する緒を得たことはすでに見て来た。帰郷後間もなく賀茂真淵の冠辞考を読む機会を得、いよいよ古学研究への意欲を強化する。この間の経緯についてその著玉勝間(二)に次のように語っている。「さて国に帰りたりし頃、江戸より上れる人々の、近き頃出でたりとて冠辞考といふものを見せたるにぞ、県居大人の御名をも始めて知りける。かくてその書はじめに一わたりみしに、さらにも思ひかけぬことのみにて、余り事遠く怪しきやうに覚へてさらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるようあるべしと思ひて立ちかへり今一度見れば稀々にはげにさもやとおぼゆる節々もいできたりければ、また立ちかへり見るにいよいよげにと覚ゆること多くなり、見る度に信ずる心のできつつ、遂に古振りの心、ことばのまことなるを悟りぬ（中略）かの冠辞考を得てかへす／＼読み味う程にいよいよ志深くなりつつ、この大人を慕う心日に添へて切なりし。」

宣長が古学への傾斜の過程を語り尽している。それがどのように発展し結実したか。

#### (イ) 真淵との対面

宣長は真淵を敬慕する念、日と共に切、直接面接して教えを仰ぐ機

会を待望した。遂にその日が来た。宝暦十三年五月二十五日の夜のこと、「松阪の一夜」として周知の通りである。ここにはその概要のみを摘記しよう。

真淵は主君田安宗安の命をうけ山城・大和の各地を巡り、伊勢神宮の参拝も終えて帰途、松阪日野町新上屋に投宿した。宣長はその報を得、急ぎ同宿所に赴き念願の真淵との対面を果たしたのである。時に真淵六十五歳、宣長三十四歳、行燈の光揺らぐ下に両学者の歴史的対談の様相は「あがたもうしの御さとし言」（玉勝・三）によってその一斑を察知できる。「古事記の注釈を物せむ志ありて、その事を大人にも申しけるに論し給へりし様は、われも素より神の御典をとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごろを清くはなれて、古のまことの意をたずねずばあるべからず。（中略）すでに年老てのこりのよはひまいくばくもあらざれば（中略）いまは年さかりにて行きき長ければ、今日よりおこたることなくいそしみ学びなば、その心ざしとぐるこあるべし。ただし、世の中の物まなぶともがらを見るにみなひききところを経ずで、まだきに高きところにのぼらんとするほどに、ひききところをだに得ること能はず。まして高きところは得べきやうもなければ、みなひがことのみすめり。このむねを忘れず心にしめて、まづひききところよりかためおき。」（下略）

老学者が自己の念願を、有為な新鋭学徒によって果しくれるよう強く期待し、そのために基礎的研究の必要を切々と論している様子が眼に浮ぶ一文である。畏敬する大先輩からの親身の忠言、真摯な後進者

の感動如何ばかりであったであらうか。同時にまた、自己の学的念願を継承し発展することの期待できる後続する偉材を見出した老学者の喜びも極めて大きかったに違いない。まこと真淵は帰江すると直ちにこの一夜の有様を江戸の門弟に語り告げた。

この年の十二月、宣長は真淵の門人寸田伝蔵を通して県居入門の念願が叶った。ただしその後は直接に面接して指導を受ける機会はなく、書簡の形で指導され激励され、時には叱咤さえ受けた。それが宣長の学的生活にどんな大きな力であったかは絮説を要しない。

#### 第四節 宣長の学問的成長と業績

##### (1) 門弟としての宣長

宣長は幼時から郷里松阪で手習いを始め、少年期には漢書の素読から和歌俳句の手ほどきを受けた。しかしそれらの師匠については彼の数多い著述中にも何等言及されていないし、その学習の様相も知る由がない。

「はたちあまりになりしほどに、学問したしとて京になん上」(玉勝・<sup>(二)</sup>)り、漢学を始め医の道を学んだのであるが漢学の師堀景山について「京にのぼりて、まず景山先生と申せしが弟子となりて儒学のまなびをす」(家のむかし物語)といっているが、医道の師堀元厚、武川幸順については多く語られていない。しかし宣長は景山を通して契沖の改観抄その他の著作に出会った。その始めは契沖を「歌学びのすぢ」の先覚者と思惟した。それも契沖の「万葉の説はなおいまだし

きことのみぞ多かりける。」(玉勝・<sup>(三)</sup>)といった程度に評価していた。ともあれ、契沖に対し「契沖はうし歌書に限りてはあれどこの道すぢを開きそめたり。この学びのはじめの祖ともいひべき。」(うい山ふみ・<sup>(四)</sup>)と断言し、古道研究の先導的地位を認めている。やや後れて現れた荷田春満や下河辺長流等国学の先行の開拓者については極く軽く触れている(うい山ふみ・<sup>(五)</sup>)が、宣長より約六十歳も年長者のことであるから直接指導を受けたこと等あり得ない。二十八歳で真淵の冠辞考を読み、三十一歳で「松阪の一夜」となったこと、すでに見た通りである。

元来師弟関係は一方的ではなく相互影響的なものである。尤もその相互関係の強度は常に同一というものではなく、師匠から弟子への影響は強いが弟子から師匠への反応は軽微である場合、或いは全くその逆な例とともなくもない。もし先行者がよき後続者を発見した場合、優れた師匠を探し求めた者が尊信できる先進者に出会った場合等その師弟の相互影響がどんなに濃密、強大であるかは贅説を要しない。真淵(師)と宣長(弟)との関係が正にそれである。

この師弟関係は書簡の往復の形で行われた。その書簡はかの佐久間象山の文章のような機略縦横・才気煥発・豁達自在・雄逕流麗さは見られないが独特のリズムを持った門弟思いの鄭重な文章である。その実例を原文のままにいくつかを列挙して見よう。

▽師↓弟。万葉再問、<sup>(弟師)</sup>裏傍書致進候。御覽可<sup>(師↓弟)</sup>被<sup>(弟師)</sup>成(明和四・十一、二十八付、書簡)

△師↓弟。既にいいし万葉より入り歌文を得て後に記の考をなすべき

が拙が本意也（明和六・五・九付書簡）

△師↓弟。惣而門弟に不仕合せにて本年も才学宜人二人まで死別致し老後力落申候。（後略）是も臥学灯火の状御推察可被<sub>レ</sub>成候さてく<sub>（つ）</sub>勞候也（同上日付書簡）

△師↓弟。名産の糸め、（菓子の名）賜り賞味致候（礼状）

△師↓弟。老眼文字不明も有<sub>レ</sub>之候。御推察可被<sub>レ</sub>成候。（書簡）

△弟の告白。↓さて所々書入れなどもて、てずからし給へる本をもかし玉へりき。古事記伝に『師の説』とて引きたるは多くその本にある事ども也。（玉勝・㊦）

△弟の告白↓わが師にてつねに教へられしは後によき考へのできたらんには必ずしも師の説にたがふとて、な憚りそとなむ教えられし、いとたふときおしへ也。（玉勝・㊦）

△師↓弟。かような御志なれば今後御尋ね無用。（師と異説を弟が主張することを認めながら、一方では断乎師たるの權威を示した書簡として要注目）

△師↓弟。かかる価値少なき事どもにかかはり候ては大切な業の達成は覚束なし。（宣長が大きな自信を以て書き上げた頓阿法師の歌集の注釈書『草庵集玉箒』Ⅱうい山びこ・㊦Ⅱを師に献呈した時の返書）

およそ右に掲げたいくつかの例でも追想できる師弟の交渉が六か年継続していたが、明和六年十月三十日、師真淵は死去。県居門下の掛取魚彦はその訃報を宣長に伝え、大人哀悼の長詩を寄せた。宣長も「おろがみてわが頼み仕へまつりし賀茂の大人、その大人はや」と結ぶ哀悼の返歌を送った。

また宣長は自ら筆をとり「県居大人之霊位」と大書し、これを霊牌として忌日毎に祀った。その実物は今なお松阪公園内の宣長の書斎の床の間に保存されている。天明元年真淵十三回忌追悼の歌会が鈴屋で催された。その際の歌集「手向草」。その序文に真淵の功を称えた詞があり「白玉の光」に事寄せた追悼の長詩が見られる。

#### (㊦) 宣長の学問的業績

松阪の一夜以後、宣長の学問的成長は顕著であった。その所産としての業績も順次発表される。彼の年譜に現れたものだけでもおよそ三十種に上り詳しくは六十種にも達する。（国学院雑誌第七号）それらのうち前後三十五か年の丹精の結晶、静かなる永年の努力の所産、古典学者として最高權威の立証である古事記伝四十四卷（寛政十年（一七九八）完成）がその代表的偉業であることは改めていうまでもない。

なお宣長の歌道方面の所論（例えば玉霞・河莉霞・鉗狂人等）は一世の歌道評論集と見られるし、文法学者としての著作（例えば玉緒・活用抄等）も見落されない。宣長のこれら歌学・語学・文学・史学等々の研究は、彼の皇道の闡明、拡充という根本意図を達成するための手段的意義を主とするものとも考えられるが、それがまた後世それら各方面の学芸それ自体として發達すべき基礎的先導的意義を有するものであった。

さらにまた、宣長は偉大なる教育思想家ないし教育者であった。その著直毘霊は彼の神道観の結晶であってそこに教育論の基調が窺われる。宣長は主著古事記伝を完成した後で自己の体験を基として書き綴ったうい山ぶみには「物学びのありしやう」（学習方法論）を懇切に説



いている。さらに玉勝間は宣長の多年にわたる読書の抄録とその隨筆であるがそのうちに教育に関する思想が豊かに盛られている。その他玉くしげ、講後談、書簡類の中にも教育関係の識見をかいま見ることができる。ただし、個々の言葉と行動は、その個々の中に個々を越えたものを鮮烈に顕現している。だから上述の諸著作を精細に検討しこれを整理すると共に門弟指導の實際を併せ考察することによって「宣長の教育学」を構成することができよう。

## 本 論

### ——宣長の教育者的側面

#### 第一節 鈴屋門下生の検討

##### (イ) 入門誓詞

宣長の書齋の床柱には一枚の板に三十六個の小鈴が赤紐を通して掛けられ「それが音をきけば心地もすがしくおもほゆ」と彼はいう。これ彼の書齋を鈴屋と称する所以である。この鈴屋の門弟になるために入門誓詞を宣長に提出せねばならなかった。この誓詞の要旨は次の四点である。(原漢文)

- (一) 皇朝の道を尊信し、敬神の儀を怠らない。
- (二) 異様な行体をしたり奇怪な説を立てたりしない。公の法度は固く守る。
- (三) 鄙劣の振舞をして古学の名を穢してはならぬ。
- (四) 宣長死後も同門者相和し互助共励する。

元来鈴屋門弟は広瀬淡窓の咸宜園の塾生のような全寮制ではなかったから門弟管理的な細則などは見られない。皇道の純粹確保と発展、それに師弟関係の永続を強く期待したのであった。この誓詞を制定した年次ははっきりしないが、入門希望者の漸増に伴ない鈴屋塾の性格を明らかにし秩序の維持を図ったものと考えられる。

##### (ロ) 鈴屋門弟数の調査

宣長の年譜によると安永二年(四十四歳)以前に伊勢国の人四十三名が入門していた。その後に入門した者を「鈴屋門人録」で調査すると次の第I表の如くである。(この表には門弟数七名以上の国または地方のみ掲げる)

次の表の外に土佐・能登各五名計十名、越後・阿波・江戸・伊予・出雲各四名計二十名、備中・播磨・肥前・駿河・日向・大和・伯耆各三名計二十一名、安芸・志摩・若狭各二名計六名、備前・豊前・摂津・出羽・越中・山城・伊豆・豊後・讃岐・信濃・和泉・陸奥・下総・飛騨・羽後各一名計十五名、以上合計四百四十七名となる。これに安永二年までの四十三名を加えると門弟総数四百九十名に達する。

##### (ハ) 門弟の職業別・年次別分布

鈴屋門弟を職業別に拾い分けてみると町人百六十六名で最も多く、農民これに次いで百十四人、神職(修験者も含む)・武士・医師・僧侶が順次これを追っている。女性は全体で二十名。外に少数ながら商家・堂上貴紳も見える。

また門弟の素質ないし学才は当然千差万別であり、入門の動機もそ

第I表 鈴屋門人数国別調査

甲斐	肥後	近江	三河	筑前	美濃	遠江	紀伊	石見	京都	松阪	尾張	伊勢	国名 入門者	年 (宣長の) 齢	年次
												1	1名	45歳	安永3
												4	4	46	4
										4			4	47	5
												2	2	48	6
												1	1	49	7
										3			3	50	8
					1					3			6	51	9
								1		2		1	3	52	天明1
													2	53	2
										1		1	9	54	3
			1							4	1	7	13	55	4
						1		7		3	2		10	56	5
	1				1							3	6	57	6
1					4					1	2	6	26	58	7
2						2				1	2	8	19	59	8
			1	2	1	4				2	21	3	36	60	寛政1
				2	1		2	4		1	1	5	21	61	2
	1	1				1				5	3	3	13	62	3
				1	1	1					28	3	37	63	4
4	1	1	2	1	2						10	6	44	64	5
	1	1	4	3	1		1			2	9	10	40	65	6
	1	2			2		6		9	1		8	20	66	7
	1							4	1	1		11	22	67	8
						2		1				6	16	68	9
	2	4	1	1		3		1	1	3		5	21	69	10
							1	1	4		2	4	23	70	11
											5	8	24	71	12
		1	1	1		3	7		5		1	3	21	72	享和1
七	八	一〇	一〇	一一	一四	一七	一七	一九	二〇	三七	八八	一二〇	四四七名 (三七八)		合 計
															備 考

れぞれ異なっていて、そこに自ら師弟間に親疎の別もあった。

次に宣長の年齢を軸として年次的に門弟数を調査して見ると次の第Ⅱ表の通りである。

第Ⅱ表 宣長の年齢と門弟数

期 間	第二期(16年)	第三期(6年)	第四期(5年)	第五期(6年)
年 次	宝暦7—永安2	安永3—9	天明1—8	寛政1—6
年 齢	28—44	45—51	52—59	60—65
門 弟 数	43 名	21	88	191
				66—72
				7—和享1
				147

右表の第一期すなわち遊学から帰郷して後十六か年は身辺多事、学問的には刻苦研鑽期である。この長年月の割には門弟数はさまで多いとは言われない。第二期は彼の研究も漸く深まり著作も漸増する六か年で、門弟数も増加して来た。第三期の七か年間に彼の高名次第に四隣及び門弟も新たに八十八名を迎えた。第四期には古事記伝も着々出版され玉轡・玉勝間その他紀行文の著も現れ学徳共に円熟の境に入り、この五か年間に門弟実に百九十一名を加えた。第五期には主著古事記伝も完成しその他十余種の著作も公にしている。入門者もこの六か年に百四十七名に達した。実に門弟の増加と宣長の高名度、学徳の成熟と深い関係のあることがこの調査で確認される。また他面松阪という地がいわゆる「伊勢詣りの街道」に当り、諸国の参詣者の輻輳

往還する要路であった事も全く見過すことはできないであろう。

## (二) 門弟の分布と鈴屋学の普及度

鈴屋の門弟は先ず地元松阪から集って来、やがて伊勢の全国各地に波及する。次で尾張・美濃・遠江と伸び、さらに京都・近江から西隣の紀伊へと拡大する。その間に彼の名声は山陰・山陽・四国・九州から陸奥の果てまで飛火し遂に全国四十四か国から門弟を迎えるに至る。これら他国の門弟は時折り松阪を訪ね、或いは鈴屋に寄寓し或いは町内民家に宿っていて鈴屋の講筵に列したのであった。ややオーバーに表現すると当時の松阪は「古学研究のメッカ」であったのである。

といっても宣長学がすでに全国的に定着し繁茂し開花し結実していたと速断することはできない。多数の門弟は商業に農業に家業を営みつつ古道に心を潜め、或いは趣味として古歌を学んだ者も多かった。富農の主人が皇国を語り、豆腐屋の亭主が古歌を口にする等々いわば「宣長学の土壌」が全国的に漸次開拓されやがてその繁茂を見るに至るのである。真実に学問としての宣長学を継承しこれが普及と発達に力を致した門弟は、実子春庭、養子太平及びその門弟を中心とする人々である。ここにはそれら後継学者の活動や宣長の死後この学流の発展者(例えば伴信友や平田篤胤等)についても一切触れるスペースがない。

## 第二節 鈴屋教育(学)の構造

宣長を「国学の大人」として見る外に教育者ないし教育思想家として探求する必要のあること、そのために彼の著、例えば直毘靈・うひ

山びこ・玉勝間・玉くしげ・講後談・書簡類等がその重要な資料であること等すでに示唆した(緒編第四節(四))。本節では、これら関連資料その他を模索し、そこに散見される教育思想・教育姿勢ないし教育方法、門弟訓育観等のできるだけ体系付け、いわば「鈴屋教育(学)」とも仮称する試案を一つの私案として提出して見ることにする。

#### (イ) 鈴屋教育(学)の基調

(a) 学問する目的、「世の中に学問というはからぶみまなびのこと」(玉勝・一)を指しているが宣長は「御国の学び」をこそ学問と称すべきである。この御国の学を皇学・神学・倭学などと称することそれ自体が「御国をかたはらになせるいひざまにしていとあるまじきこと」(玉勝・一)であるとする。御国の学は御国の道を明らかにすることが目的であり、御国の道は神々の御心を知ることによって得られる。その神々の御心は神代の古伝に示されている。神代の古伝は記紀に現われている。だから学問の中心課題は記紀の体得である。宣長のこうした根本的立場が直毘靈や玉勝間等に詳細かつ懇切に説かれている。

(b) 夾雑物の清掃、わが国は多年にわたり広くかつ深く漢意(からごころ)によって汚染された。御国の道を明らかにするために、先ずこの夾雑物を清掃することが必要である。「道を学ばんとする輩、第一に漢意儒意を清く濯ぎ去りやまと魂をかたくすることを要とすべし」(うい山ぶみ・初)。そこで清く濯ぎ去るべき漢意とは何のことか。宣長はいう「漢意とは漢国のふりをこのみ、かの国をたふとぶのみをいうにあらず、大かた世の人の万のこの善悪是非を論ひ物の理を定めいふたぐひ、

すべてみな漢籍のおもむきなるをいふ也。」(玉勝・一)これによると漢風を好みこれを尊信することだけでなく価値判断の基準を漢籍に求めることを濯ぎ去らねばならないといっているのである。「漢籍にへる趣はみな彼の国人のこちたきさかしら心もていつはりかざりたることのみ多ければ真心にあらず。」(玉勝・一)だからそれを価値判断の基準にすべきでない。わが国は漢籍を読む学者もそれを読まない俗人までが「この心のぞこりがたきさま」になっている。断乎これを清め濯がねばならないと強調する。

(c) 立志と永続、学問を志す者はその達成への牢固たる決意が肝要である。「すべて学問ははじめよりその志を高く大きに立て、その奥を究めつくさずばやまじと堅く思ひまうくべし。」(うい山ぶみ・四)しかも高遠な立志は永続されねばならない。「詮ずるところ学問は唯永年倦まず怠らず励むるぞ肝要。」(うい山ぶみ・初)である。いくらかの才能に高慢な心を持ってはならないし、非才だからとて自暴自棄に陥ってはならない。まして家業の多忙を理由にして学問から遠ざかつてはならない。「とてもかくてもつとめだにすればできるものと心得べし。」(うい山ぶみ・四)「静かな永続的努力」これこそ宣長が垂範する鈴屋教育(学)の真髄である。

#### (ロ) 鈴屋教育の教材(内容)

宣長は学問の領域として記紀を中心とする国学の外に歌学・史学・有職学等を挙げている。その学習には自ら順序があるとし、初学者は宣長の著作から入るべきだとする。「初学びの輩は宣長の著したる神

代正語を数十回よみてその古語のやうを口なれしり、又直日のみたま・王矛百首・玉くしげ・葛花などやうの物」(うい山ぶみ・初)を順次に学習せよとする。この順序は漢意に陥らない学習という立場からも大切である。これらを学習し了してから進んで学ぶ領域(教材)は拡大する。鈴屋で宣長が講釈したものを列挙すると源氏物語・万葉集・古今集・新古今集・伊勢物語・土佐日記・枕草子・百人一首・栄華物語等々。これらには自ら重要さに軽重があり、また門弟の器量によって学習する順序に前後が考慮された。

なおここで注目すべきは、宣長は漢意を清掃せよと強調するが漢籍の学習を否定しているのではないということである。否定どころか「漢籍を見るは学問のため益多し」(うい山ぶみ・ネ)とする。わが国は久しく広く漢籍が学習されていたからこそ益々漢籍学習の必要がある。但し漢籍は理論巧緻で文辞の修飾が著しいからこれに眩惑されることなく、和魂を堅持した上で注意深く判読すべきである、とする。

#### (イ) 学習方法上の諸提言

- (a) 自主性の尊重 学習の順序方法について門弟が師匠に質問することは当然であるが、師匠は決定的命令的に指示すべきでない。門弟本人の自主的な選択によって決すべきである、とする。「学びようの次第、一わたり理によりて云々してよろしと指して教へんは易きことなれど……<sup>まこと</sup>実には知りがたきことなれば、これも強ひて定めがたきわざにて、実はただその人の心まかせにしてよき也。」(うい山・ぶみ・初)
- (b) 玄人稽古説 稽古(学習)には田舎稽古・素人稽古・金持稽古・

慰安稽古等があるがこれらは何れも学問上達の学習法ではない。必ず玄人稽古であらねばならない。玄人稽古とは基礎から秩序的に学習を始め永続的に努力することを意味する。「先ずひききところより堅めおきてこそ高きところに登るべきわざなれ……いとねんごろになんいましめさとし給いたりし。」(玉勝・二)とは「松阪の一夜」の追憶である。「このみさとし言のいととふとくおぼへけるままに、いよいよ万葉集に心をひそめて深く考へくりかへし問いただし」(玉勝・二)たと宣長自身の研究過程を反省している。これは鈴屋教育の方法に直結され、低きより高きに、易より難に順序を立て体系的学習が重視された。しかもそれが永続的に努力され、そこに鈴屋の玄人稽古が実現されたのである。

(c) 回帰的学習法 学問は一挙に完全な理解に達し得るものではない。或る程度の概観を把握したら一旦他に進みやがて再び還って再検討せよと宣長は説く。この回帰的学習もまた鈴屋学習法の一特色である。「初心の程はかたはしより文義を理解せんとすべからず。先ず大抵にさらさらと見て他の書に移り、これやかれやと読みてはまた先に読みたる書にたちかへりつつ幾遍も読むうちに始め聞へざりしこともそろそろと聞ゆるように成りゆくもの也。」(うい山ぶみ・初)この言葉は宣長が真淵の冠辞考を体認するに至った体験の告白でもある。「件の書を数回読むうちその他読むべき書どものこと、学びの法なども段々に自分の料簡のいで来るものなり。」(うい山ぶみ・初)円熟した老学者の体験談こそ説得力洵に強い。

(d) 講釈問題、鈴屋においては毎月二・六・十の日に源氏を、四の日に万葉を、三・八の日に古今・新古今その他を、主として夕食後に講釈するのが常例であった。当時の儒者の中には門弟にテキストの解説と討議をさせる(会読法)方法を探る者が少くなかった。宣長はこの方法の価値を認めながら初学者に対しては多く講釈法を採った。宣長は先ずテキストの「下見」を要求する。「下見をよくし、はじめ力の限り自らとかく思いめぐらし、聞えがたきところは殊に念を入れかきしむ読みおけば、聴く時はよく心にとまる故にさともこよなくして忘れぬ物也。」(玉勝・㊦) 入念な予習の上で師の講釈を聴聞するのであるから確実な理解もでき肯綮にあたった質問もできる。「講釈もただ師のいふことのみ頼みて己からいれをことを思わず聞くことのみむねとせんは言い甲斐なく口惜しきわざ也。」(玉勝・㊦) まさに師匠の一方的講説を無批判に盲目的に聴聞するだけでは「言い甲斐なく口惜」しい学習態度である。さらに宣長は「家に帰ったらんにもやがて省るといふことをして、聞きたりし趣き思い出して味うべし。」(玉勝・㊦) と、聴講後の復習省察の要請である。下見(予習)の上で緊張した聴聞と積極的な質疑、加えて周到な復習と厳密な批判的省察、正に完璧な鈴屋講釈学習の姿である。

(e) 聞書問題 ここに聞書とは「始めより師のいふままに一言も漏らさじと筆放たずことごとく書き綴る。」意である。(玉勝・㊦) 事の内容を理解してその要領を記録することではなく、盲目的な記述・機械的なノート主義を聞書と規定した宣長はこのような学習を好まない。

何故か「聞く方よりも後れじと書く方に心忙がわれて、特によく聞くべき節をもちい紛れて聞きもらし、或いはあらぬ節に聞きいがめもする。」(玉勝・㊦) からである。このような心力の浪費と要点的脱落と曲解とを生じがちな機械的な聞書が、門弟間に広く行なわれている一因は師匠側にもその禍根がある、と宣長は主張する。「今日の儒者のうちに、もはら聞書のための講釈なる類も多かるはいと味気なき習なむありける。」(玉勝・㊦) この宣長の指摘に対し堂々と反論し抗議できる儒者果して幾人あろうか。

(f) 自主的抄録の必要、宣長はいわゆる聞書こそ否定するが「忘れぬべき節など折々にいささかつつにても記しておく」(玉勝・㊦) こと必要なことを強調する。師の熱誠あふれる講釈を馬耳東風と聞き流すことや、読書でも漫然と読み棄て徒らに速読することを強く戒めている。学問が次第に上達するに伴ない読書の内容の要領を抄記しその批判ないし注釈を記述することはまことに望ましい。「書を読むに何となく読むときはいかほど悉く見んと思ひても限りあるものなるに、自ら物の注釈をものせんと心掛けて見る時は何の書にても格別に心のとまりて見ようの詳くなるものにて、また外にも得ることの多きもの也。」(うい山ぶみ・㊦) 宣長の玉勝間は多年の読書の抄録であり批判であり隨筆であると見られる。それは門弟への望ましい自主的抄録の示範でもある。

(g) 方法論余説 宣長は物を説き論ず法として、先ず物の色と形と意味につき正面か

ら説明する。それでもなお不徹底の場合、色を示すには同類のものを借用してそれと同色であると語り、形を知らせるには、それがし某の形の如しといひ、事の意味を知らすにはそれと近似のものの例を二三を挙げて示すべきだと玉勝間⑤に語っている。物の解明について近代論理学は二つの方途を挙げている。明晰法クリヤー・メソッド（そのものを正面から解説する方法）と判別法ディスタン・メソッド（そのものに近似なものとの差異点、相違点を明示する方法）である。宣長は明晰法の他に近似物との類似点を挙げ、明晰法と相待って正確な理解に達せしめようとする。これまた一つの見識である。

宣長はまた五十音や仮名遣いの正確な学習の大切なことや書物を書写する場合の注意を子細に説いている。「すべて物を書くは事の心を示さんとなれば、おふなおふな文字定かにこそ書かまほしけれ。」（ねんころに真心こめて）（玉勝・六）特に手紙の文字が乱雑なため「いひやるすぢ行き通らず」（言いたいこと―主張・伝達したいこと）かへさひ読めども遂に読み得ず。或いは想像的に判読して「ことたがいもするぞかし。」（玉勝・六）これみな正確で読み易い文字の練習不足に基づく。文字が正確で平明であることの大切なのは書写と手紙の場合だけではない。歌を書く場合でも文字が下手では「なのおあかずうちあわぬ心地ぞするや。」（玉勝・六）宣長も人に依頼されて短冊を書くことがあるが「われながらだにいとかたはに見苦しう——恥かしくむねいたくて、若かりしほどなどて手習いせざりけむといみじうくやしきなん。」（玉勝・六）と深く後悔している。

## （二） 鈴屋の訓育観

宣長は本来の日本人は「本は神州清潔民」であり、清く明るく直き

真心を生得していると見る。しかし多年にわたり広く深く深く漢意によってこれが汚染されている。だから学問（教育）はこの汚染を浄化して本来の姿を明確にしこれを実践することを目的とする。

このような人間観、教育観から門弟の訓育において、師から外からの教誡よりも弟子から内からの純粹な自然の伸長を尊重し期待する。清く明るく直き心の内からの伸長を妨害するものは排除しなければならぬが「もろこしの古書ふるふみひたすらに教誡のみをこちたくいへるはいとうるさし。」（玉勝・四）といひ、不当な厳格な教誡を非難している。言葉が続けて「人は教（誡）によって善くなるものにあらず。もとより教をまつにあらぬを、あまりにこちたく誡め教へるから中々に姦曲詐偽のみまさることを知らず。周公坦あまりにこちたく定めたるが故に周の末に乱をおこせり。」と断ずる。

さて日本本来の風尚はどうか「皇国の古書には露ばかりも教へがましき事見えず——教誡の厳なるをよきことと心得たるは愚なり。」（玉勝・四）すべて人を厳しく教えを立て悉く善人にのみしようとすることは例えば一年には四季があるのに春の温暖期のみにししようとするのと同様に無理なことである、と説く。

とはいえ、人の道を誤り世の規範を逸脱する者は厳しく処置すべきである。入門誓詞に反する行為のある者は断乎嚴重に処分された。門人穂積梁満への破門の書簡（天明五年十月十四日付）はその例証である。宣長は人間自然の内面的真情を尊重し、形式的な封建道徳を批判している（全集十卷一六八頁）がまた上の示すところと世の伝承は固く守る

べしとする。抑々人たる道を天下に示しこれを実行せしめるのが君（人の頭に立つ者）の責務である。世に伝承されている風習慣例はこの道の具現である。だからこの道を尊重しこの伝承に忠実であらねばならない。のみならず仮りに「今のおこない道にかなはざらむからに下なるもの改め行はむは私事にて中々に道のところにあらず——道にかなはずとて世に久しくありならひつる事を俄かに止めんとするはわろし——下なる者は善くもあれ悪しくもあれ上の御おもむけに従いをるものこそあれ。」（玉勝・二）と。ここに至っては極端な慣習と伝承の尊重であり「時々（みづか）の御法も神のみことしあればいかで違はん」とは承詔必謹の主張である。尤も人の頭に立つ者（君）は神の御心たる道の大本を誤り示してはならないことを注意しているし、伝承・慣習について（道理に適合しない点）も「そのそこ（あるままに）ないのすぢをはぶき去りて、あるものはあるにてざし（おいて）おきて、まことの道を尋ねべき也。」（玉勝・二）と付言してはいる。

### 第三節 落穂一束

#### (イ) 師説の尊重と批判

宣長は「あがたのうしのみさとし」を限りなき感謝の念をもつて彼の著の各所に記述している。師と友と書を三尊として尊びながら尊師をその第一とする。師を衷心から尊信し敬慕すること宣長に如くはないであろう。それは決して盲目的屈従ではない。「師の説なりともわろきを知りながら言わず包みかくしてよざまにつくりい言はむは唯師を尊びて道を思わざるなり。」（玉勝・二）と。けだし学問は道の探求

が生命だからである。師説とても道に反するなら従うべきでない。「後によき考への出でたらんには必ずしも師の説に違うとてな憚りぞ。」と断言する。もし道の解明において師の説よりすぐれた説を出すことを尊師に反し学恩を忘却する輩であると譏るなら譏るがよい。このような師への造反は「かへりて師を尊ぶにもあるべし。」（玉勝・二）と毅然として言い切る。宣長は道教観においても漢意清浄説についても師の真淵と同調しない点があり、万葉の解説に関しても全面的に盲従しなかった。こうした姿勢は鈴屋教育にもはっきり現れている。「わが教子に戒めおくよう」との一文がそれである。「われに従い物学ぶ輩もわが後にまたよき考の出できたらんには必ずわが説にななづみてぞ。わが悪しき故をいひて良き考へを広めよ。惣（そうじて）而己が人を教ふるは道を明らかにせんとなれば——道を思はで徒らにわれを尊まんはわが心にあらざるぞかし。」（玉勝・二）

#### (ロ) 学説の改進とその発表

学者の所説に前後変化改進ある場合、宣長はこれを如何に評価したか。「始め定めおきつることも程経て後によき考の出で来らんことは常にあることなれば、始めと変ることこそよけれ。」（玉勝・四）学に忠実なる限り所説に改進あることはむしろ当然であり、これなきは学に怠慢の証でさえある。特に古学の道は未だ研究されること浅く未開拓の面も多いと思惟する宣長は「人を経、世を経てこそ次々と明らかとなりゆく業（わざ）なれば、一人の説きごとのうちに先なると後なると異なることはもとよりあらでは之ならぬ業也。」（玉勝・四）と明言する。



しかし新説の発表は充分に慎重であらねばならない。名声を得んと欲し未熟な説を臆面もなく公表する如きは「なかなかなるいみぢきひがこと也。」(玉勝・二)といい、語を續けて次のように警告する。「すべて新たな説を出すはいと大事也。幾度もかへさむ思ひてよく確なるよりどころをとらへ、いづくまでも行き通ひて違ふことなく動くまじきにあらざればたやすくは出すまじきわざ也。その時はうけばりして良しと思ふも程経て後に今一度よく見ればなほ悪ろかりけるとわれながらだに思ひなるることの多きぞかし。」(玉勝・四)老学者の諄々たる教誡、それは学派学流を越えて千鈞の重みある箴言である。

#### (イ) 異(誤)説と秘事口伝

世には自分の所説と異なる学説(時には誤りのある学説)に対し「その悪しきを咎めずこれとかれも捨てぬさまに論あやういをなすもの」もあるが、これは「世の人の心に普く迎へんとするもの——まことにあらず心汚し。」(玉勝・四)と宣長は断言し、学問に関する限り寛容を装って迎合的な同調を罵倒する。是もよし彼もよしと公正振るのは実は立場が確定せず確信のない証拠である。「寄るところ定まりてそれを深く信ずる心ならば、必ずひたむきにこそよるべけれ。それは違へる筋を採るべきにあらず。」(玉勝・四)「人はいかに思ふらむもわれひたむきに偏りてあだし説をば悪しと咎むるも必ず悪しとは思はずなむ。」(玉勝・四)学人宣長は峻烈で俗論に動ぜず時評に阿ることなく、真価を後世に待つという信念がこの語のうちに読みとれる。

次に学問や芸道において秘伝・口決と称し世に広く漏らさず秘めか

くし、或いは極く少数の特定の者にのみ伝授する風習がある。この風習に対し宣長は「一向にとるにたらぬことのみ也。」(講後談)といい、また「濫みだりに広くしぬればその道軽々しくなるといふなるも一わたりの理あるようなれども——なを世に拡まるこそよけれ。広ければおのずから重きかたはあるぞかし。」(玉勝・九)とする。およそ秘事ひみつことは高遠・機微で一般凡庸者のよく達し得るところのものではないとするが、それは独占的權威の護持が本音であり「私の汚き心」と宣長はきめつける。「世間にあまねくひろめて人にきかせてこそ益あるべけれ。」(講後談)道の公開と拡充に努めてこそ其の発展があり自ら權威も高め得るといふ前向きな姿勢が看取される。

#### むすび

上述の宣長の教育論には体育方面への提言は見当たらないし、その訓育論にも伝承尊重や遵法論には問題点もある。その他教育方法論にも批判すべきものが存するであらう。「花を見るための桜の木を薪として用いる」ような主張があったかも知れない。結局は彼は国学者として強固な神道的信念に立脚していたところに根本的な限界があると言えよう。

しかし宣長の教育論には見るべきものが多い。ここに一々それを挙例する必要はあるまい。唯、紙幅の関係で充分に触れることができなかったが、宣長は人間の精神(心)と行動(事)と言葉(言)の三者は密接な重要な相関関係があるという事及び人世の現実複雑で神秘

的で有限な人間の知恵では説明し尽すことはできず、吉凶は相互転移し、一つの法則らしいもので律しきれないという考え方を教育方法論の基調としている点を改めて注目しておきたい。(吉川幸次郎・本居宣長) またこの小稿の落穂一束中の所説にも傾聴に値するものがある。就中、(一)終始一貫祖国と民族の栄光高揚に努め (二)よく中正を守って偏ることなく (三)静かな永続的エロスに徹し (四)門弟を信頼して抱擁し、しかも毅然として門弟に迎合することなく (五)巧まずして弟子からの尊信と畏敬を一身に浴したこと等々現今の教育者が最も深刻に自反自省し篤く宣長に学ぶべきところと考える。

ともあれ「教育者としての宣長」を深切精緻に探求し厳正に検討し直して見ることが極めて重要である。かくして彼の近世教育史上の地位が確定するであろう。この小稿がそのための一つの捨石ともなれば幸甚である。

(昭和五二年八月初旬稿之) 本学特別客員教授・教育学

(終り)

(付) 本居宣長研究書 (発刊年次順)

著者	書名	刊行年及出版社
村岡典嗣	本居宣長	明治四四年警世社書店
田中義能	本居宣長の哲学	明治四五年東京堂
本居清造編	本居宣長稿本全集	自大正一一年博文館刊 至同十二年
本居清造	増補本居宣長全集	自大正一五年吉川弘文堂 至昭和三年
河野省三	国学の研究	昭和七年大岡山書店

奥山宇七編	本居宣長書簡集	昭和八年啓文社
佐々木信綱	真淵と宣長	昭和一〇年湯川弘文社
河野省三	本居宣長 (家文庫)	昭和一二年北海出版社
村岡典嗣	本居宣長	昭和一四年岩波書店
村岡典嗣	本居宣長全集	自昭和一七年 至同一九年岩波書店
和田甚五郎	訂本居宣長集	昭和一八年地平社刊
岸本芳雄	国学者の思想と教育	昭和三四年新思潮社
岸本芳雄	近世神道教育史	昭和三四年新思潮社
岸本芳雄	本居宣長 平田篤胤	昭和四〇年玉川大学出版部
上賀田共閔	国学者伝記集成 (一)	昭和四二年名著刊行会
吉川幸次郎	編集 本居宣長集 解説 本居宣長小伝	昭和四四年筑摩書房
山田勘藏	本居宣長	昭和四五年鈴屋遺蹟保存会
吉川幸次郎	本居宣長	昭和五二年筑摩書房
小林秀雄	本居宣長	昭和五二年新潮社